

6 「乳巖治験録」をだれが書いたか

松木明知

弘前大学医学部麻醉科学教室

呉秀三が一九二三年（大正十二）に大著「華岡青洲先生及其外科」を発表して以来、華岡青洲の事績は本邦の医学界に広く知れ渡ったが、呉が東京帝国大学医学部の精神科の教授という肩書きに加えて、著名な医学史の研究者であつたため、彼の著は絶対視され、青洲研究のバイブルとして尊重されてきた。それ故に後続の研究者は呉の説に盲従してきたといつても過言ではない。このことは呉以後に上梓された研究書のすべてが呉の過ちを踏襲していることよつて立証される。

青洲の最大の業績は麻沸散（一名通仙散）の開発によつて、それまで不可能とされた多くの難病を治療したことであり、そのために麻沸散による最初の全身麻酔下の手術を記録した「乳巖治験録」の存在は、この症例を世界で最初の全身麻酔と認定する上で重要であ

る。

しかし呉は「乳巖治験録」について多くの誤りを犯した。第一は「乳巖治験録」の乱丁に言及しなかつたことである。第二に「華岡青洲先生及其外科」に「乳巖治験録」の写真を掲載してあるが、写真に手を加えていることである。例えば第七枚目の裏は、原史料では本文が三行であるが、呉の写真版では五行になつている。写真で示されれば、だれでも第七枚目裏には本文が五行あると思ひ込むであろう。歴史研究者、医学史研究者として決して行つてはならないことであつた。

第三に藍屋かんの手術年を一八〇五年（文化二）としたことである。「乳巖姓名録」にかんの診療日が一八〇四年（文化元）十月十六日とあることからこのように呉が解釈したのであるが、「乳巖治験録」には初診後約四十日で行われたことが明記されている。呉が「乳巖治験録」を精読していなかつた一証左である。

第四の過ちは「乳巖治験録」を青洲の自筆としたことである。自筆としたが故に、この「乳巖治験録」は日本の一千数百年の医学の歩みにおいて、最も貴重な

史料の一つとされてきた。

演者は三十数年間「乳巖治験録」を研究してきたが、「乳巖治験録」についての呉の記述には多くの誤りが存在することに気が付いた。とりわけ「乳巖治験録」を青洲の自筆とする呉の主張を承服できない。「乳巖治験録」には余りにも漢字についての稚拙な誤りが多く、とても漢詩文も良くした四十四歳の青洲が書いたとは思えられないからである。例えば第三枚目裏には「独嘯庵」、「方枝」、「亂岩」とある。特に医学を意味する「方枝」が「方枝」、「乳岩」が「亂岩」と書かれていることは決して看過出来ない。医師であれば漢字が似ているからといって「内科」を「肉科」、「麻醉科」を「床碎科」と書くであろうか。この事実だけでも「乳巖治験録」が青洲の自筆ではありえない確証と演者は考えるが、このことを記して日本医史学雑誌に投稿した。しかし査読者から論文は拒絶された。数回のやりとりの後、今度は演者が査読されることを拒否した。査読者が査読する能力がないと判断したからである。さらに演者は、誤字、誤用の点ばかりでなく、筆跡の点か

らも「乳巖治験録」は青洲の手になるものとは考えられないことを立証してきた。

今回は全く別の観点から「乳巖治験録」の筆録者が青洲ではあり得ないことを証明したい。「乳巖治験録」の第五枚目裏の第六行目から七行目にかけて「留于我客舍服之二十有余日」とある。「二十有余日」の「二」は後に書き加えられたことは、墨の色調、文字の間隔からも明らかである。原筆録者が「十有余日」と誤ったので「二」を付け加え「二十有余日」と訂正した。青洲が書いたのであれば「二十有余日」と書くはずであり、「十有余日」と誤るはずはない。患者かんの入院期間を正確に知らない人物が筆録者であることを物語っており、このことから筆録者を絞り込むことが可能である。口演において演者の推察を詳細に述べる。